

城山三郎賞 選考委員会より

現在を過去と未来から問う

片山善博

第三回城山三郎賞は選考委員三人の合意により、辺見庸さんの『増補版 1★9★3★7』及び北野慶さんの『亡国記』の二作とした。いずれを選ぶか、突っ込んだ議論をしたものの、敢えて一作に絞り込むことなく二作を受賞作とするのがふさわしいとの結論に達した。

『増補版 1★9★3★7』は、多くの日本人がほとんど知らされることのなかった過去、父祖の時代の歴史の闇に光を当てている。例えばNHK朝の連続テレビ小説でよく登場するのが、大陸の戦地に赴く若者を涙で見送るシーンである。残された家族は空襲で焼け出され、食料を求めて買い出しを余儀なくされるなど塗炭の苦しみを味わう。戦争が終わりやつれた姿で若者が帰ってきて、みんなで力を合せて生活を再建することになる。

ここからは、戦争が日本人にいかにか酷い犠牲を強いたか、そして平和がいかに尊いかを体感できる。ただ、この種のドラマでいつも語られないのが、ではこうした若者たちは戦地でいったいどんな生活を送り、何をしてきたかということである。本作品はそこに照準を合わせ、戦地を直接あるいは間接的に体験した人たちの「語り」を通じてあぶり出す。そこにはわれわれの知りたくないことがこれでもかというほどあらわにされる。でも、それを正視しなければ、同じ過ちを繰り返す可能性を拭えない。

一方、『亡国記』は三・一一東京電力福島第一原子力発電所過酷事故を閲した日本の近未来に光を当てて。あれからまだ五年ほどしかたっていないし、まだその後始末もできていないというのに、まるであれはたいしたことではなかったかのように原発は動き始めている。あんな事故はもう二度と起こるはずがないとの慢心もはつきりと見える。それが日本や世界に何をもたらすか。一つの絶望的な道行きを示したのがこの作品である。

『増補版 1★9★3★7』は過去を振り返ることで現在を質し、『亡国記』は将来を占うことで現在に迫る。いずれもが現在の政治や社会のあり方、われわれ日本人の振る舞いや考え方を厳しく問う作品である。是非、多くの方に読んでいただくよう願っている。